様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月２３日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５３０６３６
研究課題名（和文）　国際化社会における４，５歳児のリテラシー学習を促すプログラムの開発研究
研究課題名（英文）　Developing a program to enhance four- and five-year-old children's literacy learning in the internationalized society

研究代表者
白川　蓉子(SHIRAKAWA YOKO)
甲南女子大学・人間科学部・教授
研究者番号：８０１０８８５２

研究成果の概要：幼稚園の４，５歳児が好きな遊びを選んだ活動のなかで、リテラシーに関心をもち、自発的に解読したり、書いたりしていることがわかった。この幼児自らの学びを教師は教具などをふくむリテラシー環境を整えて意図的に指導する必要がある。その際、話す・聴く・書く・読む、の四活動を同時並行的に導入すべきである。また幼児自身の「話したい」「書きたい」という「言葉への意識」と欲求が重要であることが明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	2,500,000	0	2,500,000
２００７年度	800,000	240,000	1,040,000
２００８年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	3,700,000	360,000	4,060,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：①リテラシー環境，②リテラシー学習，③4－５歳児，④国際化社会，⑤幼小一貫カリキュラム，

１．研究開始当初の背景

(1)就学前の４，５歳児は生活のなかで平仮名、片仮名、漢字、アルファベット、数字、等の多様なリテラシー環境に取り囲まれている。４、５歳児になるとこのような文字や数字に関心をもち自発的な読み書き（イマージェント・リテラシー）を始める。幼児教育では幼児自身の自発的な学びを援助することが基本であると、これまでの発達学習理論から明らかになっている。

(２)幼稚園教育要領では領域「言葉」のなかでリテラシーに関しては「(10)日常生活のなかで、文字などで伝える楽しさを味わう」の内容項目が定められているが、これについての実践事例と指導方法は開発されていない。

(３) 幼稚園で計画的な読み書き指導が行われていないことから、小学校入学後の国語、算数などの教科指導に移行することへの不安を抱く親は、子どもを幼稚園降園後に幼児教室や塾に通わせている。また急速に進む国際化の流れのなかで、子どもを早期から英語教室に通わせる親や、幼稚園へ英語教育を導入することを望む親が増えている。

２．研究の目的
(１)幼稚園・保育所の４歳児、５歳児の読み書き(リテラシー)と話し言葉の学習を幼児の発達にふさわしいかたちで促し、小学校教育へ繋げるような教育計画を立案するのが本研究の目的である。そのために、
①４，５歳児の自発的なリテラシー学習の道筋を園生活や遊び活動から抽出しし、４，５歳児の発達と照合しながら系統化する。
②小学校第一学年の国語の教科書を検討し、さらに授業を分析することによって、就学前の２年間にどのようなリテラシー能力が重要かを検討する。
③上記の検討を踏まえて、４，５歳児に有効かつ重要なリテラシー学習のプログラムを教具の制作も含めて考案する。

(２)幼児期の発達にふさわしいリテラシー学習のプログラムを協力園で実践し、協力園と継続的にそのプログラムを実施しながら改善して行く。

３．研究の方法
(１)協力幼稚園で４，５歳児クラスを観察し、幼児の自発的なリテラシーの学びの事例を収集する。

(２)協力小学校の第一学年の国語の授業をビデオ収録し、児童のつまずき場面を抽出し分析する。あわせて教科書「こくご　一　上　かざぐるま」(光村出版)）を学習指導要領と照らして検討する。

(３)インターナショナル・スクールで英語を(で)学んでいる日本人幼児の英語学習の実態を吟味する。(研究協力者の資料をもとに)。

(４)国際学会(環太平洋乳幼児教育学会)を通してリテラシー教育の研究者と研究交流をするとともに諸外国の幼稚園・小学校への英語教育導入の実状を調べ、メリットとデメリットを検討する。

(５)ヘルシンキ大学を訪問し幼年期のリテラシー教育に取り組んでいる研究者と研究交流を行い、同大学で幼・小連携の「６歳児特別プログラム」を開発している M.オヤラ教授を招へいし、幼・小連携カリキュラムの開発の仕方について示唆を得る。

(６)５，６歳児のリテラシー学習を促す教具の作成。大学の「遊び学習論」という授業と連携し、大学生に遊具制作に参加させる。

４．研究成果
(１)幼稚園では「好きな遊びをする」時間に多くのリテラシー学習につながる活動を行っていることがわかった。自分の作品に自分の名前を平仮名で書く、お店やさんごっこ、お手紙ごっこ、絵本の拾い読み、などで４，５歳児クラスでは頻繁にリテラシー活動を行っていた。ただし、幼児が遊びのなかで自発的に読み書きを行っていても、それを教師が意図的に指導するかによって、リテラシー学習を促すかどうかが決まってくる。例えば、幼児が友だち同士でお手紙(絵入り)の交換を楽しんでいるとき、幼児に「文字や絵などで自分の気持ちを離れている相手に伝えることができる」ことを学ぶのをねらいにするか、赤い郵便ポストの制作をねらいにするかによってリテラシー教育の成立が決まってくる。幼児の日常生活や遊び活動のなかから意識的にリテラシーの学びにつながる活動を系統化することが今後の課題であることがわかった。

(２)「読み書き学習」と「話し言葉で表現すること」の関連性が新に確かめられた。ヘルシンキ大学のリテラシー教育の研究者と協議した際に、フィンランドの幼児期のリテラシー学習では、「言葉への意識」(linguistic awareness)を重視しており、話す speaking, 聴く listening,読む reading,書く writing を同時に習得させる方法を取っていると報告されたことが印象深かった。協力幼稚園においても同じ方法が取られていた。長期間にわたる物語（ピーターパン）の読み聞かせかせ⇒ピーターパン遊び⇒幼児からの自発的な台詞⇒ピーターパンの劇の上演。この過程で幼児たちの「言葉への意識」が高揚する。このような「話し言葉で表現したい」という欲求を基礎にして「文字を書いて表現したり」「本を読んで物語を知りたい」という欲求が生まれる。このような「言葉への意識」と欲求のないところで幼児にワークブックやフラッシュカードで読み書きを教えるのは、即効性はあるが身につかない学習になるであろうことが予想される。

(３)小学校第一学年の「こくご」の内容を検討した結果、幼稚園の「言葉」でとりあげる内容やねらいと重複していたり、不整合なところが見られ、また一学年の児童の発達やリテラシー環境、リテラシー欲求と合わないと思われる点などが多々あった。これは今後の課題である。

(４)４、５歳児のリテラシー学習を促す様々な遊びと遊具を考案した。例をあげると
①あ　アのように１カード１文字の平仮名と片仮名のカードを用意する。⇒混合したカードを二つのかごに分類する。⇒平仮名カードを引いて自分の名前を作る。ゆ　か　り　⇒友だちの名前を作る。

②数字カード、正方形の絵カード（りんご，えんぴつ，折り紙，等１個描かれている)、数え方カード（こ，ほん，まい）と三種類のカードを用意する。例）りんごのカード３枚を並べ、数字カード3と数え方カードのこを選んで並べる。
③すごろく　サイコロの目の数だけ進むのは同じであるが、進んだ場所に簡単な動作を指示する言葉(例えば「一つてをたたく」)が書かれていて指示どおりの動作をしなければならない。

(５)国際学会で諸外国の幼稚園や小学校低学年からの英語教育の導入の実態の報告を聴取したが、外国語としての英語を早期年齢に導入した事例(台湾、韓国、中国)では研究者の間にも賛否両論があり(幼児教育研究者は概ね反対論である)、結論は出なかった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

①Yoko Shirakawa and Rieko Iwahama, Oracy and literacy practices in a Japanese Kindergarten; a theoretical examination. Early Child Development and Care Number 7, 2007 p1.-8 査読有

② Mikko Ojala, Bernard Spodek, Yoko Shirakawa, Educational Reform and Child Raising in Finland 「子ども学」第 10 号 2008 年　５－１６頁　査読無

〔学会発表〕（計　２件）

①白川蓉子，北野幸子，バーナード・スポデック，ムギョーン・ムーン：乳幼児教育保育研究と政策の国際動向　日本保育学会 2007 年 5 月 20 日　十文字学園女子大学

②Yoko Shirakawa, Kanako Nishikawa, A project
Method in the content area of ‘Expression’ in a Japanese Kindergarten; Encouraging free play into a Dramatic Play, ‘Peter Pan’ 環太平洋乳幼児教育学会　2008 年 7 月 7 日, Chulalomgkorn University, Bangkok, Thailand

〔図書〕（計　１　件）
①O.N.Saracho/ B. Spodek(ed.),白川蓉子・北野幸子・山根耕平訳　培風館　『乳幼児教育における遊び－研究動向と実践への提言』2008 年，２３３頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

○取得状況（計　０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
白川　蓉子（SHIRAKAWA YOKO）
甲南女子大学・人間科学部・教授
８０１０８８５２
(2)研究分担者

(3)連携研究者